広島県立保健福祉短大紀要　2 (1) 1−9　1996

現代の変化する社会における看護教師に必要な諸能力に関する研究
−看護教員養成修了者の調査を通して−

大　下　静　香[*1]　　佐　藤　みつ子[*2]

A study of the abilities necessary for nursing teachers in our changing society
- A questionnaire for graduates of the nursing teachers education course -

Sizuka OSHITA[*1] and Mitsuko SATO[*2]

Abstract

In this changing society, it is necessary and important to understand what abilities are necessary for nursing teachers, for they must teach nursing students who will be required to have very high qualities. This study was done to try to clarify what abilities are required in our society nowadays.
Subject: 280 nurses who completed the training course to become nursing teachers.
Method : Questionnaire survey.
Result : The necessary abilities for a nursing teacher include three different aspects:
1. intellectual−a knowledge of nursing and education.
2. technical−skills in education, student guidance, human understanding, and problem-solving.
3. emotional−well-rounded personality.

抄録

現代の変化する社会のなかで，看護教師の能力を理解することは必要且つ重要な課題となっている。というのは，看護教師は高い看護の質を要求される看護学生の教育に携わるからである。

現代における看護教師の能力は何であろうか．本研究は，変化する社会の中における看護教師の能力を明らかにすることにある。

調査の対象者は，280名の看護教員養成修了者である。方法は質問紙法で行った。その結果，看護教師に必要な能力は３つの側面からなっている。

１．知的側面：看護の知識，教育の知識
２．技術的側面：教育技術，学生指導の技術，人間理解の方法，問題解決技法。
３．情緒的側面(人間性)：豊かな人間性であった。

Key Words：nursing teachers, personality, training for nursing instructors, curriculum, necessary abilities for a nursing teacher
キーワード：看護教師，人間性，看護教員養成，研修内容，看護教師に必要な能力

はじめに

21世紀を目前に保健医療・福祉をめぐる社会の状況は，高齢社会，疾病構造の変化，医療技術の高度化・専門分化等により，医療従事者の質的向上が要求されている。

看護においても在宅における高齢者のケア，慢性疾患や障害を持つ人々の地域看護等訪問看護事業はますます需要が高く，社会からの期待は大きい。このような社会情勢において，看護教育は施設中心の教育から健康・不健康を問わず地域で生活している人々をどのような場においても看護できることを目標とした内容の教育が必要とされてきている。即ち，看護の場の拡大や看護内容(看護判断能力と変化への対応力，保健医療・福祉との調整能力など)の質的向上が問われている。

看護への役割期待に応じて，看護婦教育カリ

＊１　広島県立保健福祉短期大学看護学科　Department of Nursing, Hiroshima Prefectural College of Health and Welfare
＊２　山梨医科大学医学部看護学科　School of Nursing, Faculty of Medicine, Yamanashi Medical University

キュラムは大きく教育内容の変化を遂げている。平成元年には，保健婦助産婦看護婦法指定規則のカリキュラムが改正され，技術中心の教育から学問追求への教育傾向を示してきた。今また平成9年に看護婦教育のカリキュラムが改正されようとしているその改正カリキュラムでは，「ケアを必要としている人々が生活しているすべての場において看護実践できること」という看護の“場”の拡大である。これまで以上に看護教師には高度な専門的知識と技術が求められ，教師としての力量が問われる課題である。この時代の要請を受けて，看護教師を養成する機関としては，変化に対応できる能力を備えると同時に専門職業人としての自覚が芽生えるような看護教師の育成を目指した教育内容の改善が必要であろう。そこで，本研究は看護教員養成課程修了者の調査を基に看護教師に必要な諸能力を明らかにすることを目的とした。

看護教育の現状

1．看護婦教育の現状

現在の看護教育は，看護基礎教育，保健婦教育，助産婦教育，准看護婦教育の4つに大別することができる。看護教育を修了した後，定められた国家試験あるいは都道府県知事による試験に合格した人だけが，看護婦あるいは准看護婦の資格をもって看護に従事できる。

近年，保健医療をめぐる環境の変化に伴い，看護に関する社会ニーズは高度化し高い質の看護実践能力が求められるようになってきた。このような社会の変化に対応することができる看護職者の育成の必要性から看護基礎教育の大学化が叫ばれ，大学教育へと移行しつつある。大学における教育は，これまでの看護婦・保健婦・助産婦教育と別個に考えられてきた教育を，統合カリキュラムとして展開されている。更に，看護教育者・看護管理者・看護研究者など専門家育成の教育として看護大学院(修士課程・博士課程)が設置されて，専門家の教育がはじめられてきているが実際には量的に不足しているのが現状である。1997年の国立の大学院，大学の新設と，「大学設置・学校法人審議会(文部省)の答申によると，看護系大学は54校設置」されている。

わが国の看護婦教育の大学は増加傾向にあるが，まだ専門学校(3年課程)における教育が大半を占めている。

看護基礎教育は，大学教育を除いて，3年間のカリキュラムであり，学習時間は3000時間となっている。この時間数は指定規則(保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則)であって，学校によっては科目数を増やし，過密となっているところもある。3000時間の内訳は，基礎科目360時間(12%)，専門基礎科目510時間(17%)，専門科目945時間(32%)，臨床実習1035時間(35%)，選択必須科目150時間(5%)である。臨床実習は，学内で学んだ知識や演習等で学習した技術を統合しながら看護実践能力を習得し，さらに看護職者としての態度形成をめざしている。このことからみても，臨床実習は看護基礎教育の統合学習ともいえる重要な科目である。

看護基礎教育の内容は，看護実践者の育成を目的としていることから，看護に必要な知識・技術を習得させ，看護婦としての態度形成をも重視した教育となっている。従って，看護教師は看護に関する教育と学生の人間形成への教育にもかかわることを余儀なくされているのである。

今後は21世紀に向かって，社会の変化に対応し得る質の高い看護職者の育成を担う看護教師の創造的発想と力量が問われる時代であろうと考える。

2．看護教員養成の現状

昭和42年のカリキュラム改正により，看護基礎教育はこれまでの疾病中心のカリキュラムから患者中心のカリキュラムへと移行した。また教育の大半は医師に委ねられていたが看護婦教育は看護婦によって行うことの必要性から看護教師中心となった。看護教育者の人材不足から看護基礎教育に携わる人を確保する目的で看護教員養成が研修としてはじめられた。現在は1年コースであるが，入学者の大半は看護専門学校の卒業者である。したがって，教職課程の基礎となる教育に関する知識・技術に欠けるため看護教育学をマスターするには1年課程はハードスケジュールとなっている。

平成のカリキュラム改正は，医療機関中心ではなく，生活している人々のケアを中心とする看護の場の拡大により，看護婦に看護判断能力，変化する状況に対応できる力や保健医療・福祉チームとの調整能力など質的能力が期待されている。また学生の心身の発達段階を加味した教育として，主体性や豊かな人間性を育む教育が必要とされるであろう。こうした看護教育の確立に伴い，看護教師の教育は最早教師の数ではなく質的向上が望まれるところである。現在の看護教員養成課程への入学者は大半が看護専門学校卒業者であり，終了後は，看護専門学校の教師となる研修であって，看護教師の資格ではない。将来は看護教師養成の機関として，看護大学卒業者をベースとするのか，あるいは大学院において看護教育学を専攻した者が看護教師としての資格が得られるのか，看護教師教育の課題であろう。

看護教員養成の概要

1．教育目的・目標

看護教員養成課程は，看護教員としての知識と技術を習得させることにより，看護教育の向上に寄与し得る人材を育成することを目的としている。教育目標としては，① 看護教育に必要な理論と教育方法を習得する。② 看護教員として必要な研究の基礎的知識と方法を学ぶ。③ 看護教員の役割を認識し，自己の教育観を明確にする。④ 看護教員として，常に研鑽する態度を養うことの4つをかかげている。

2．教育課程の特徴

教育課程は，社会や教育界の動向および看護・看護教育の動向を踏まえ改善されてきている。現在は，ゆとりある教育課程を目指して総時間数を減少し，学科目の選択性を導入している。(表1)。学科目の構成の考え方は，一般教育科目，教職科目，専門科目に区分し，他に特別講義や科目外活動(自己成長＝豊かな表現法をめざしての合宿セミナー)を加えている。学科目別には，次のような特徴を有している。一般教育科目は，看護教育に関連する領域の理解

表1　看護教員養成講座　教育課程

	学科目	授業科目	時間数	必須	必須選択	選択	備考
一般教育科目	哲学	認識論 生と死の思想	15		○		
	行動科学	行動科学 生命科学	15		○		
	心理学	青年心理学 社会心理学	15 30	○ ○			
	社会学	医療社会学 家族関係学	15		○		
	倫理学		30	○			
教職科目	教育原理		15	○			
	教育心理学		15	○			
	教育方法	教育方法Ⅰ 教育方法Ⅱ 教育方法Ⅲ	30 30 15	○ ○ ○			
	教育評価		30	○			
	教育制度		15	○			
専門科目	看護論	看護論Ⅰ 看護論Ⅱ	20 40	○ ○			
	看護教育史		30	○			
	看護教育課程	看護教育課程Ⅰ 看護教育課程Ⅱ	45 15	○ ○			
	看護教育方法	看護教育方法Ⅰ 看護教育方法Ⅱ	75 60	○ ○			
	看護教育評価		15	○			
	看護学校管理		15	○			
	看護教育実習		135	○			
	看護教師論	看護教師論Ⅰ 看護教師論Ⅱ	12 18	○ ○			
	看護研究	看護研究Ⅰ 看護研究Ⅱ	15 60	○ ○			
	看護管理論		45	○			
宿泊セミナー			35	○			
情報科学			30			○	
体育			15			○	
特別講義			30			○	
合計				855	45	75	
				900			

をねらいとし，教職科目，専門科目の基礎とする。教職科目は，教師として必要な知識・技術を学ぶとともに教育観を深め，専門科目への応用に備える。専門科目は，看護理論の考え方を導入として自己の看護観を確認したうえで，一般教育科目・教職科目の学習を活用しつつ，看護教育に必要な基礎的知識・技術を学ぶ。さらに看護教育実習や看護教育論，看護教育研究を通して，自己の看護教育観を明確にする。特別講義や科目外活動は，看護教師としての自己研鑽に必要な課題や社会の動向に伴う看護教育に関連する諸問題について，講義・演習・見学の形態をとっている。(表1)

看護教師の能力

能力とは，『広辞苑』によると「① 物事をなしうる力・はたらき，② 精神現象の諸形態を担う実態」とあり，また『新明解国語辞典』では「特定の仕事をなし遂げることができるかどうかという点から見たその人(物)の総合的な力」とある。

このように能力とは，生きていくための力量であり，さらに，環境に対応したよりよい生き方をするために自己学習をしながら培っていく力でもある。

看護教師の能力としては，社会の要請に応えられる看護婦を育成することのできる能力，即ち専門的知識・技術と看護教師であることの自覚と責任性を有し，教師であるまえにまず人間的成長を指向する力量をもっていることであろう。

今日の教師像として藤岡は[1]「(1) 新しい教師は人間としての成長を指向している。(2) 教師は教育の研究者である。(3) 教師も一個の学習者であり，その学習もまた人間の学習である。即ち人格としての教師は，思考−感情−行動の統合された全体である。(4) 新しい教師は高度な共同のあり方を希求している。新しい教師は人間の学習はいつも社会的であること，即ち人間関係の中で生まれ，人間関係の発展の中で質的な深まりをみせることを知っている。新しい教師は関係の内にあって，関係の発展をめざす「開かれた」教師である。(5) 教師は個性的であり，さまざまな影響の結果としての，またそれぞれの可能性を備えた独自的人間である。教師の欲求や価値は“自己概念”に集約される。これが教育活動の中でどう判断し，どう行動するかを決める大きな要因なのである」と述べられている。このことからもわかるように，教師というものは教えるという態度でなく，人間としての成長をはかり，そのうえに看護教師としての専門知識(看護学・教育学・臨床看護の知識)と技術を備え，日々の実践から教育技術を習熟し，研究していくことにより，教師の能力を向上させていくものと考える。図1に教育実践のプロセスを示す。

看護が実践の科学であるならば，看護理論を知っているだけでは看護実践はできない。看護を行うに当たって，患者にとって最良の看護はなにか，看護のプロセスにおいて看護の理論は活用されるものである。また看護実践を繰り返すなかで新しい方法論を導き，理論化していくこともできる。

看護教育においても看護学の学習指導であれば，看護教師は看護の知識は勿論のこと，看護教育実践のなかで教育の問題を明確にし，解決する姿勢が重要である。また教育実践を通して，教師自身の人間性が養われ，看護教育の理論や教育技法も培われていくものと考えられる。岸[2]は，ボルノウのいう「実践に理論を先行させるのでなく，あくまでも実践から理論を構築していく方向をとる。すなわち，教育の現実を直視するところから，理論を創り出し，その理論を常に修正せんとするのである。」と提言されている。看護が実践の科学ならば，ボルノウの「解釈学的方法」によって，看護実践(現象)を良く見極め，看護理論を構築していくことも可能である。また教育方法においても実践から

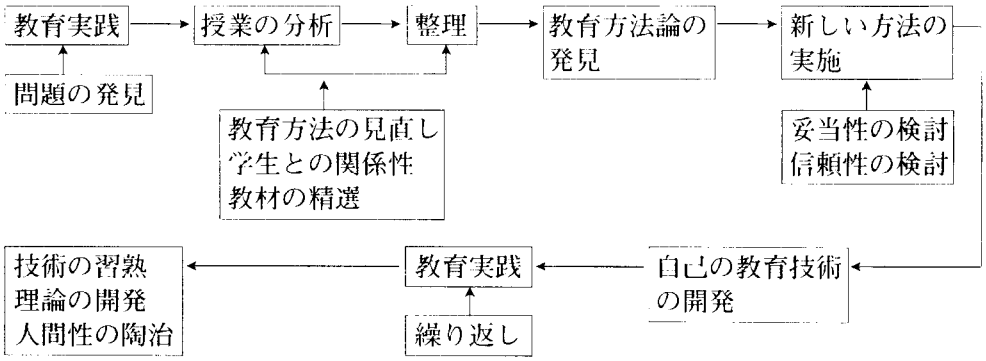

図1　教育実践プロセス

新しい教育方法論を構築することができるものと考える。

教師の専門性は自らの授業において学生たちをみつめ，自己の授業経験から学べる思考様式を身につけることが必要である。そして学生一人ひとりの良さを生かし，自ら学べる力を育てていくことが求められるのである。

研究方法

1．調査対象：看護教員養成修了者　280名
2．調査期間：平成７年10月から11月30日
3．調査方法：郵送による質問紙法
4．調査内容：看護教員に必要な能力と研修内容(研修に必要な科目，必要のない科目，看護教員養成にとって重要な科目，今後充実させたい科目)の自由記載法で行った。
5．分析方法：分析は記載内容を複数で読み取り，ＫＪ法を用いて分析し，カテゴリー化を行った。

結果

1．調査対象者の背景

表２に示したように，年齢は20歳代が20.0%，30歳代が58.2%で40歳代が21.1%，50歳代が0.7%であり，30歳代が全体の半数を占めていた。

表２　調査対象者の背景

N＝280

項　目	区　分		人数(%)
年　齢	20歳代		56(20.0%)
	30歳代		163(58.2%)
	40歳代		59(21.1%)
	50歳代		2(0.7%)
現在の勤務場所	臨床看護		103(36.8%)
	看護教育		148(52.8%)
	地域看護		1(0.4%)
	看護行政		1(0.4%)
	その他		27(9.6%)
現在の職位	臨床	臨床看護婦	57(20.4%)
		主任看護婦	23(8.2%)
		看護婦長	22(7.8%)
		看護部長	1(0.3%)
	教育	専任教員	143(51.1%)
		教務主任	5(1.8%)

現在の勤務場所は，臨床看護36.8%，看護教育52.8%，その他(看護行政・地域看護)10.4%であった。現在の職位は，臨床の分野ではスタッフナース20.4%，主任看護婦8.2%，看護婦長7.8%，看護部長0.3%であった。(表２)

2．受講の動機

受講の動機は「自ら希望する」32.8%，「上司・先輩友人の薦め」21.6%，「上司の命令」19.0%，「教員志望と無関係に勉強したいため」16.3%

表３　看護教員に必要な能力

区　分	看　護	教　育	一般教育
専門知識	看護の知識 臨床看護の知識 人間理解の知識 看護観 看護教育観 看護学校経営の知識 臨床実習指導論	教授法の理論 学生指導の理論 カウンセリングの知識 教育観 教育原理 学校経営に関する知識 教育評価	一般教養 論理的思考 問題解決方法論 統計学(情報科学) 整理学 論文の書き方 (レポートの書き方)
専門技術	実習指導技術 学校経営の技術 看護学教育法 学生指導の方法 看護研究方法 臨床看護技術 基礎看護技術 マネージメント	教授法 学生指導法 カウンセリング技法 研究方法 教育評価法	人間関係成立の技法 問題解決技法 リーダーシップの技術 判断力 情報処理法 表現法
情意的側面 (豊かな人間性)	寛容さ．誠実性．決断力(意志決定能力)．判断力．自己教育力 情熱．温厚な性格．社会性．感受性の豊かさ．自己洞察力．好奇心 協調性．感情のコントロール．ユーモア．創造力 包容力．柔軟性		

「臨床実習指導者になるため」16.0%，「看護教員の資格用件であるため」7.9%であった。

3．看護教師に必要な能力

看護教員養成修了者の多くは，看護教師の必要な能力として“人間性”が多かった。次に専門的な知識，技術として，看護観・臨床看護能力・看護教育方法・学生指導などであった。教育に関する知識・技術では教育観，教育原理，教育方法，教育評価，教育心理であった。一般教育的な面では人間関係能力，問題解決能力，が多く，人間の資質的な面では自己学習能力，自己洞察力，判断力，思考力の必要性が求められていた。(表３)

4．研修内容

研修の内容については，①　看護教育に重要な学習科目は「看護教育方法」，「看護論」，「看護教育実習」，「看護教育課程」，「教育原理・教育方法・教育心理」であった。その中でも「看護教育方法」が高い値を示していた。②　研修で必要な学習科目は，「人間関係論」，「カウンセリングの理論と実際」であった。③　教授内容を充実させたい学科目は，「看護教育方法」，「教育評価」「看護研究」，「看護教育評価」であった。④　現在教育実践上役立っている学習科目は，「看護教育方法」，「看護論」，「看護教育実習」，「論理学」，「看護教育課程」，「看護教師論」であった。⑤　看護教員研修に必要のない学科目は，「情報科学」であった。

考察

1．看護教師に必要な能力

看護教員養成課程修了者の考える看護教師に必要な能力は，大半が資質としての人間性を強調していた。次に知的側面として，教職専門領域，看護及び看護教育の専門領域，一般教養の必要性を高く評価している。技術面では，教育方法，学生指導の技術，臨床看護技術，基礎看護技術，問題解決法即ち，学生にどのような方法を用いて学習指導をすれば効果的であるかという“指導技術”と教師自身が習熟していなければ教授できない“看護技術”の必要性をあげている。これは教育実践をとおして看護実践力だけでは教育はできないことを認識したものと考えられる。

社会の変化に主体的に対応できる専門職として，生涯学習の必要性を自覚し，自ら学ぶ意欲と態度が重要であることの認識から，自己啓発能力の必要性が示唆されている。

豊かな人間性としては，感情のコントロール，寛容性，思いやり，包容力，柔軟性，協調性，誠実性，忍耐力，社会性のあることが望まれている。

(1) 人間性の陶冶

看護教師の人間性を修了者の大半が求めている。それは教育は教師と学生との相互信頼関係のうえに成立するものである．学生との精神のふれあいによって，お互いにケアしケアされる関係が成立し相互に影響を与え人間的成長を促すのである。修了者は教育実践において，学生や他の教職員あるいは医療関係者と関わるなかで，相互信頼関係がそれぞれの人間的成長に及ぼす意義の大きさを深く吟味していくことの大切さを感じたためと考えられる。つまり，教師の全人間像が学生に影響を及ぼすということである。例えば，学生に「発問する」発問の仕方，内容，学生からの回答の受けとめ方や日常の学生への接し方等に教師の人間性・教育観が表れるのである。更に，看護教師は看護の対象であるさまざまな状況にある人との関わりや看護の対象をとりまく人達との関わりをも必要とされている。その関わりには相互の良好な人間関係が求められることから人間性の大切さが認識されたものと考えられる。

人が人の教育をすることは，自己の生きる力と他者を見る目，受容する姿勢，話の聴き方，正しい方向にしむける力が必要である。それはまた人間を画一的にとらえるのではなく，個をしっかり育てることでもある。このように教育は教師と学生の相互作用による影響が大きいことから教師の人間性が問われるのであろう。

看護教師の能力として，伊藤[3]は「１つは，看護観を明確にしつつ看護実践力を高めること，１つは，教育実践力を高めること，１つは，人間性の陶冶である」と述べている。

このように看護の教師であるならば，看護の考え方をしっかりともち，看護実践能力を向上させることである。それにプラス教育実践を重ねるプロセスにおいて，人間性が培われていくものと考えられる。Milton Mayeroff[4]は「私は自分自身を実現するために相手の成長を助けようと試みるのではなく，相手の成長を助けること，そのことによってこそ私は自分自身を実現するのである」と述べている。相手の成長を助けることにより，自己実現をうながすことができる。人間は人と人との関係において自己成長し，人間性が培われていくものと考えられる。

(2) 教職専門知識・技術

教職専門領域では，教育に関する知識として，教育原理，教育方法，学生指導の方法，教育心理，社会心理，教育評価をあげている。看護婦であれば看護教育ができるというものではない。看護婦は臨床看護のキャリアはあるが，教育者とはいえない。修了者の教育的背景からみて看護基礎教育(３年課程)におけるカリキュ

ラムは看護実践者の教育であり，3年間という短い期間のなかでは教職に必要な基礎科目は組み込まれていない。従ってそれは看護婦になるための基礎教育であって，教育専門の基礎となるカリキュラムではない。こうした背景をもつ人達が看護教員養成課程を修了しないまま看護教師になると，学生指導の方法や教授法あるいはカリキュラムの全体が見えなく教育上の問題に遭遇し，教師としての自信を失うこともある。例えば，学生指導において看護への関心を深めさせるにはどのような学生へのかかわりが必要なのか，また看護学をわかりやすく具体的に展開する教授方法がわからず，学生との相互信頼関係がぎくしゃくし，看護教師が重荷になり，臨床看護への移動もみられるのである。

教育は単なる知識の伝達であれば，テキストあるいは参考文献を学生に読ませて，知識を習得させるということでよいかもしれない。しかし，今日のように複雑な社会にあっては，学生に知識の伝達さえすればよいという教育は成り立たないであろう。

複雑な社会をどのように生きるべきか，生き方の方法を考えさせる学習が必要である。それには知識の使い方を生きたものにすることが重要である。人間をどのように捉えるか，個人がその人らしく生きていけるように助力するのが教育の本質であると考える。

木場によると[5]「教員に人間観の狭さがあれば，それはそのまま看護観，患者観の狭さとなり，学生への影響となって現れるであろう。真の意味での専門職業人として，21世紀の看護を背負う看護者を育てる教員として，発想の転換や素養を深める努力がほしい」と教員の人間観の狭さが指摘されている。教育実践において，人間観・教育観を広く明確にしていくことも必要である。

(3) 看護及び看護教育に関する知識・技術

看護及び看護教育に関する知識・技術として求められるものは，看護観，看護基礎技術，臨床看護技術，看護教育方法，看護教育評価，学生指導法，人間関係論，看護教育課程論，問題解決法などであった。

看護教師は学生に未来の看護の担い手として，成長するために学習の援助をしていく援助者であり正しい方向に導く指導者でもある。看護教師には学生が看護の価値を認識できるように主体的活動の素材を教育課程に組織だて，学習指導をしていく役割があると考える。従って，看護教育実践において，修了者は授業の計画・実施・評価のみならず，教育計画への参画や学生指導上の問題，社会の変化に主体的に対応できる教育の開発など看護教師の責務が問われていることから，修了者はそれらの必要性を認識されたものと考えられる。

看護者への専門的知識・技術の教育はますます高度となり，教師の努力は必要であるが，このような社会であるからこそ，学生に情意面の教育が必要とされるのである。それには人間関係，学生指導法，カウンセリングの技法等人間と人間の係わり方など学生の態度形成の教育方法を思考することが要求されていると考える。看護教師は自己の人間観・看護観を基盤に，看護教育にあたることが大切である。

(4) 自己学習能力

自己学習能力として，広い視野，好奇心，問題意識，自己洞察力，学習意欲，向上心など自ら学ぶ意欲，態度をもつことの必要性を提示している。修了者自身受講前は自己学習の習慣がないまま過ごし看護問題に遭遇してはじめて悩み，学習の必要性を認識するのである。また問題意識をもって解決方法の一つとして研修を受ける。そこで自ら学ぶ意欲・態度を培い教育業務に携わっていったものと考えられる。研修においては，学校教育とは異なりある程度自分自身が主体的に学習しなければ，効果があがらず，充実した学習にはならないのである。研修の学びは看護教師教育の全てではなく，導入であり，自己学習方法を修得せさるものである。実際に現場に出て研修の学びを参考として深め，看護教師としての能力を高めていく必要がある。修了者は研修での学びと教育実践を通して，看護教師の責務が見直され，自己学習能力の必要性が認識されたものと考えられる。

2．研修内容の認識

研修内容に関して，①．必要のない科目は「情報科学」が多かった。それは情報科学の学習内容が理論的な講義に集中し，修了者の関心あるコンピュータの操作法や具体的な統計処理法まで学習ができなかったことから修了者は授業への期待がはずれ，学習意欲が薄れたものと考えられる。21世紀に向けてますます情報化・国際化の社会となり，看護教育や看護研究には必須のものとなる科目である。今後は研修の内容として，研修者の関心を高めることができるような授業内容にしていく必要があると考える。

②　必要な科目としては，「人間関係」，「カウンセリングの理論と技法」が多かった。

看護は人間理解から始まる実践の科学であるといわれているように，対象である人間を理解しなければその人にとっての最良のケアは望めない。教育においても学生と教師との人間関係が基盤となって学習が成立し，学習活動の活性化が図られるのである。また看護・教育共対象が人間であることからさまざまな人間関係に関する問題に遭遇し，解決方法に苦慮することが

しばしばある。このようなことからみても人間関係やカウンセリングの知識と技術の必要性を認識したものと考える。

③　最も重要な科目は，「看護教育方法」，「教育方法」，「看護論」，「看護教育実習」，「看護教育課程」であった。これらは実際に日々の教育に必要不可欠のものであり，研修で学習したことが即自己のものとなっていれば活用出来る教育の基礎知識と技術である。

④　充実させたい科目は「看護教育方法」，「教育評価」，「看護研究」，「看護教育評価」であった。「看護教育方法」は研修生の個々の専門分野の展開でなく，基本となる基礎看護学を題材として学習するためと研修においてはじめて学ぶ学習であることから，理解できなかったものと考えられる。「教育評価」，「看護教育評価」，「看護研究」についても，教職専門の学習をはじめて行うことから専門用語の理解に苦慮し，短時間ではゆとりをもって学習できなかったものと考えられる。これは研修以前の問題として，教育に関する学習がされていないことにも原因があると考えられる。

⑤　役立っている科目については「看護教育方法」，「看護教育評価」，「看護教育実習」，「論理的思考」，「看護教育課程」，「看護教師論」であった。これらは日々の実践に必要不可欠の知識技術であるため，教育実践をとおして学習を深めていったものと見受けられる。これらの科目は全て看護教育に必要な知識・技術であり，看護教師として不可欠の内容である。教育実践を繰り返すなかで工夫し，活用していったものと見受けられる。

看護教育現場において，繰り返し授業を行い，学生に日々接するなかで看護教育技法が習熟されたものと考えられ，研修の内容が基盤になっていることから役立っていると認識されたものと考えられる。

1年の研修では一つの学問を深く追求する時間もなく，表面的にながされていく場面が多く，よほど自己学習を行い補充していかなければ自己のものとはならないであろう。箕浦らは[6]「看護教員の現状と生涯教育に関する意識」について調査し，以下のように指摘している。「看護教員は看護基礎教育や看護教員養成で学んだ内容では十分に職務を遂行することが困難であり，自己の職務にあわせて内容を積み重ねていく必要性を実感しているといえる。」この指摘は本研究の結果にも通じているので，系統的に深まらない学習であっても，学習意欲は高まり，看護教育への関心が高まったことで継続学習への動機づけになっていることは望ましいことである。研修は看護教育への動機づけであり自己学習力の促進である。その学習を教育実践に活用し，学生とのかかわりにおいて相互の人間的成長が教育であると考える。

おわりに

看護教員養成課程修了者の看護教師に必要な能力に対する調査から，研修の内容や研修後の継続学習の必要性が示唆され，看護教師に必要な能力を明確にすることができた。このことをふまえて，看護教師の質の向上のために，めざす看護教師像に向けて研修内容の充実とその教育方法を改善し，教育への関心が深められ生涯学習へと発展できる能力を育成したい。　教育の本質は先輩となる人が，社会に適応して生きる生き方を導くものであり，これからは個人の特徴を生かし，人間関係を重視したユニークな教育方法の開発が望まれることであろう。

看護基礎教育におけるカリキュラムの改正が平成9年から実施されることになり，ますます看護教師の実力が問われる今日である。人が人を教育するということはどのような意味を持つのか，自分自身でじっくり物事を考え，試行錯誤を繰り返すこともあろうが，ひとつのことを組織だてるという訓練を積み重ねることも大切である。また表面的なとらえ方でなく，物事を広く深く考えるようなトレーニングを試みることも必要であろう。本来ならば，看護教師の教育は現在の看護教員養成課程(1年コース)ではなく，学校教育に位置づけ，看護教育専門コースとして大学院レベルでの教育が必要と考える。専門コース修了後は教育実践のなかで，自己の能力を高め，学生個々の能力を伸ばせる教師であり，看護教育への探究心をもつことも大切である。

これからは看護学教育も国際性などを加味した内容や看護理論追求へのレベルも高く求められるであろう。また看護教師は看護実践能力，学生の主体的行動力を育てるための看護教育方法の開発や教師自身の研究，自己評価能力を身につける必要があると考える。

文献

1）藤岡完治編：感性を育てる看護教育とニューカウンセリング．東京，医学書院，45-47,27-28,1995
2）岸信行：看護を支える人間学　ボルノーの人間観と看護実践．東京，錦光出版, 28,20-22,1979.
3）伊藤暁子：看護教員の能力開発・資質の向上のために　教員として何をどう学んでほしいか．看護展望，6:7;18, 1991.
4）Milton, Mayeroff　田村真・向野宣之訳: ケ

アの本質ー生きることの意味ー．東京，ゆみる出版, 70,1987
5）木場冨喜：教員の質の向上のために　21世紀に向けた看護婦養成を考える．看護展望，20:30;306-309,1995
6）箕浦とき子他：看護教員の現状と生涯教育に関する意識．神奈川県立看護教育大学校紀要,17;20,1994